

Title	テオドール・フルルノワ著『インドから火星へ』：第6章火星の輪廻(続き)：火星語(3)(翻訳)
Sub Title	Théodore Flournoy, Des Indes à la planète Mars : chap. 6 Le cycle martien (suite) : la langue martienne (3) (traduction)
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.81 (2025. 10) ,p.31- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20251031-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

テオドール・フルルノワ著 『インドから火星へ』

——第6章 火星の輪廻(続き)：火星語(3)(翻訳)——

小 野 文

Ⅲ．火星語に関する注記*

読者が少しでもこれまでの火星語の文章に注意を払っていたとすれば、それが最初の二つの文章だけだったとしても、おそらく火星の言語と言われるものについてすぐに納得がいったことだろうし、私がそこで何もコメントしていないのに驚くかもしれない。しかし、スミス嬢の交霊会の常連の多く——そしてもちろんスミス嬢自身も——が、それを疑いなく真正のものとしているので、どうしてこの「火星語」が、私の目にはフランス語の幼稚なパロディーとしか見えないのか、言わずに済ますことはできない。さらに、レオポルトが権威を持って主張するような天文学的重要性はないにせよ、心の下部意識の活動から自動的に産出されるものに関与する心理学的な関心は十全に残っており、いくらかの検討に値するのである。

まずは最初に火星語（簡便なので引き続きこのように呼ぶ）を正當に評価しておく必要があるが、これは一つの言語であり、その場その場で偶然に生み出される音声による、くずれた言葉や訳の分からない言葉ではない。実際、

* 訳注：このセクションには火星語とフランス語が入り混じるため、フランス語は« »に入れ、火星語はそのまま地の文として残すことにした。また必要に応じて日本語の意味を[]の中に入れてある。

以下のような性格を認めない訳にはいかないのである。1) 明瞭に発音される音の総体であり、それらの音は、語形成されるべくグループ化されている。2) これらの語は、発音されるときには、限定された観念を表している。3) 最後に、語と観念の関係は一貫している。別の言い方をすれば、火星語の意味作用は恒常的であり、この三年間に集められた文章の隅から隅まで、維持されている（若干の微細な不整合を除けば、であるが、これについては後ほど述べる）¹⁾。

エレーヌはときに夢遊病状態で話すため（4、11、15等の文章）、すらすらと少し早めに話される火星語には、ある種の音が支配的であるせいで、記述が難しい特有のイントネーションのせいで、聴覚上の特徴があると付け加えておきたい。人は理解できない外国語でも聞き分けるのと同じように、また全ての言語はそれと分かる特別なアクセントを持っているように、最初の音節を聞くやいなや、エレーヌが話しているのはヒンドゥー語か火星語か、この二つの固有語がそれぞれにもつ固有の傾向に沿う音楽的性質やリズム、子音や母音から、それと識別できるのである。ここから分かるように、火星語は自然言語の趣きを持っている。私が言いたいのは、火星語が純粹に知的な計算の結果ではなく、美的次元の影響、感情的要因が一緒になってこれを作り出し、直観的に半諧音や好ましい語尾を選ばせたということだ。火星語は、スミス嬢が冷徹な頭で通常の状態にいるとき、言うならばフランス語の状態にいたときに作られたものではなく、この言語はその特徴的調性の

1) 火星語には、一言語としての本質的な性格——すなわち実践的な確立、生きた存在のあいだのコミュニケーションの手段となる事実——が欠けているのではないかと反対する人がいるとしても、結局のところ私たちはそれについて何も知らないのだとスミス嬢のように答えるつもりはないが、しかしこの問題の社会的側面についてはここでは関係ないのだと言っておきたい。ヴォラピュック語やエスペラント語でさえ未だ何の役にも立っていないとしても、これらが言語であることに変わりなく、また火星語は、こうした人工的な構築物よりも、正常な人格の意識的で考え抜かれた意図的参与なしに自然発生的に創造された自然言語であるという点で、心理学的にみて優れている。

うちに、特別な情動傾向、特定の心的性分あるいは心的傾向、エレーヌの火星語状態とでも呼べるような特別な精神状態の徴を帯びているのである。この言語遊戯に喜びを感じている下部人格は、バラ色の岩からなる火星のエキゾチックで色彩豊かな視覚映像を面白がり火星物語の登場人物を動かしている人格と同じものであるようだ。

先の文章群をちょっと眺めるだけで、フランス語と比べて火星語にもあるいは *ê* と *i* が圧倒的に多く、母音連続と鼻母音がほとんどない、という特徴が見てとれる。火星語の文章とそのフランス語訳を声に出して読むとき、耳を打つ母音の音のより正確な統計を取ると、図表 I ²⁾ のようなパーセンテージが得られた。しかし母音は、聴覚的観点からすると特徴的な固定音から識別され、また異なる高さの音の範囲に分布していると知られている。*i* と *é* は最も高く、*a* と *o* は中間部、*u* と *ou* は低い部分となる。したがってつねに無声化された鼻母音と無音の *e* をこれに合わせると、表 I が得られるが、これは音の高低の観点から表 II の三つのグループに分けられるのである。ここから火星語は、一般的にフランス語よりもずっと高い音調なのだと分かる。というのも二つの言語は、中間部の母音に関してはほぼ同じ割合を持つが、低音部や無音の母音がフランス語の母音のほぼ半数を占めるのに対し、火星語では辛うじて 12 分の 1 であり、その反対に火星語の高い音は大まかに言うと母音の 4 分の 3 を占めるのにもかかわらずフランス語では 3 分の 1 でしかない。

2) 言うまでもなく、すべての統計の自然な結果である小数点以下の数字が続いているにもかかわらず、この表は、特定のケースにおける母音評価（とりわけ *e* の場合）の恣意的な性質を考慮すると、おおよその価値しか主張できない。しかし私は、火星語の高音に関しては、フランス語に比べて一般的な結果は実際よりもさらに低いと考えている。これは火星語の固有名詞に *é* と *i* に非常に多くあるため、フランス語訳にそのまま登場し、これらの高母音の割合が不当に増えているためである。——この統計は、最も間近の火星語文章（36 から 39 まで）が発される前に作成されたが、これも統計に僅かで目立たない修正を加えるだけで、表 II の全体的な結果には何の影響も及ぼさない。

表Ⅰ：母音の統計

	火星語（％）	フランス語（％）
a	16.3	13.7
無音の e	3.6	20.8
狭母音、半狭母音の e [é に相当]	36.9	14.3
広い母音の e [ê に相当]	2.1	4.6
i	34.3	13.4
o	2.3	5.7
u	2.3	3.1
母音連続と鼻母音（ou, oi, eu, an, in, on, un）	2.1	24.5

表Ⅱ：音の高低の観点からのグループ化

	火星語（％）	フランス語（％）
高い母音（i と無音でない e）	73.3	32.3
中間母音（a と o）	18.6	19.4
低いあるいは無音の母音（u；母音連続と鼻母音；無音の e）	8.0	48.4

他方、感情的類似性と有機的反応のバランスに基づく共感覚研究が明らかにしているのは、高い音と明るい色・鮮やかな色とのあいだ、低い音・無音の音と暗い音とのあいだに、緊密な心理的關係性があることである。ところでこの同じ相関性が、スミス嬢の夢遊状態の生において、火星の輪廻を特徴づける眩しく明るい色彩溢れるヴィジョンと、同じ輪廻に出てくる高く響く母音の言語とのあいだに見られるのである。したがって、この多様な心理的産物を包み込んでいるのが同じ情緒的雰囲気であり、この視覚と音声の自動性を生み出しているのが同じ一つの人格なのだという結論づけが許されるだろう。よく分かることだが、想像力は何もないところから虚構を作りだせず、個人的経験からその材料を借りてくる必要がある。たとえそれを奮い立たせ

る情緒的傾向に応じて、選別したり変容させたりすることがあったとしても、である。それだから、火星の情景は地上の世界の反映でしかなく、しかもそれはより熱くまた輝いている場所、オリエントなのである。同じように、火星語はフランス語由来でしかないが、変容させられ、上の音域に引き上げられているのである。

したがって火星語を一言語だと私は認めるし、それがスミス嬢の意識の参与なしに、情緒的な状態において、あるいはこの輪廻の一切の源となっている二次的・自我によって、自動的に産み落とされた自然言語だと認めるのである。あとは次のような幾つかの特徴を指摘するだけである。すなわちこの閩下の言語学すべてを発明した者はフランス語以外の言語を知らなかったこと、論理的思考関係よりも口頭表現によりいっそう敏感であること、そして火星物語の作者についてすでに指摘したように、子供っぽい幼稚な特徴を優れて備えていること、である。そのために、音声学、書記体系、文法形態、統語と語彙の観点から、この新しい言語を手短にはあるが検討してみるのがよからう。

1. 火星語の音声と書記

火星語は分節された音からなるが、それらは全て、子音も母音も、フランス語に存在する。この地上で私たちの言語に地理的に近い諸言語（より離れたものについては話さないことにすれば）が、幾つかの特別な音でお互いに差別化している一方で（ドイツ語の ch、英語の th）、火星の言語はそのような音声的な独自性を持っていない。逆に、火星語はフランス語よりも貧弱に見える。これまで私はシュー音の j（ジュ）あるいは ge（ジュ、「juger」の語にあるような）にも、二重音の x にも出会っていない。（上に挙げた、集められた文章についてしか話さないことにする。というのも、いくつかの集会の口頭表現は拾い集めるのが不可能であったが、そこでは j も確かにあったようである。だがここでもやはりフランス語にはない単音を全く認められなかったし、この奇妙な言語の音声の独特な風情は、私たちの言語にはあまりない、音合成の豊富さにのみ起因するからである。例えば tch（チ）音で

あるが、これは文章 1 と 3 にのみ見受けられる)。火星語の音声は、一言でいえば、フランス語の音声の不完全な再生産でしかない。

火星語のアルファベットを私たちのものに近づけてみると (p. 185 の図 24)、これまた同じ指摘ができる。確かに文字の線描形態は新しく、これらのエキゾチックな様子の線画には、私たちの文字を思わせるものは全くない。しかしながら火星語の記号それぞれは (複数形の記号を除いて) フランス語の記号に相当し、一方でその逆は真ではない。つまりはここでも私たちの書記体系のみすばらしいコピーを目前にしているわけである。

比較を行った 12 の書かれた文章は、おおよそ 300 の語 (そのうち 160 がそれぞれ別の語) と 1200 の記号を含む。合わせるとそこには 21 の別々の文字があり、それぞれ全て、フランス語のアルファベットに正確に対応しているが、フランス語は火星語にはない 5 つの文字を持っている。j と x、この二つの文字の音は観察できない。q、w、y の 3 つは、要するに k、v、i が兼ねている。文字素材が減らされていることは、他の二つの事実からも分かる。まず、フランス語のアクサン・シルコンフレックス (ˆ) に似たもので、ときに文章の終わりを記す点の変わりにもちいられる記号の他は、火星語にはアクセントや句読点がないこと。二番目に、各々の文字には一つの形態しかなく、大文字・小文字の類は火星語には存在せず、また筆記体や活字体のようなものもないこと。数字については、何も分からない。

しかしながら三つの小さな特異点を記しておきたい。1) 大文字がないため、固有名詞の最初の文字の上にしばしば点が付けられる。2) 二つ同じ文字が続くとき、二番目のものは最初の文字の右に、点で記される。3) 最後に、名詞といくつかの形容詞の複数形を表すとき、特別な文字が用いられること。これは発音には影響せず、フランス語の s を重ねたような形を思わせる、縦型に曲がりくねった記号で表される。これらの特徴が、文字の外観に加えて、火星の書記体系にもちいられる考案物全体をつくりなしている。この書記体系は、通常は傾いておらず、私

たちのものと同じように左から右へ書かれると付け加えておこう。非常に小さい*i*だけを例外として、全ての文字がほぼ同じ高さであり、それぞれ互いに孤立している。語や文として集まったとき、それらの文字は、東洋的ヒエログリフの碑文³⁾のような視覚的印象を与えるのである。

火星語のアルファベットはアルファベットとして明らかにされていないので、文字がどの順序で並んでいるのかは分からない。しかし、フランス語の文字の一連に対応する火星語の文字形の類似性から判断するなら、少なくとも大半において、私たちのアルファベットに準じて考案されているようである。*a*と*b*、*g*と*h*、*s*と*t*を、そして*k*、*l*、*m*、*n*の連なりを比べてみてほしい。他方、*u*と*g*、*z*と*h*、*f*と*v*を並べてみたときに、フランス語の文字と大変違う文字のなかに奇妙な関係性を確認することができる。また*c*と*i*は、単にフランス語から火星語で互い違いに取り替えをただけのように見える。全体として、これらの奇妙な文字をその形の類似性にしがたって整理しようとした場合、5つのかなり異なったグループに分けることができる。最初のグループには*c*と*r*しか入らないが、これは直線からのみできている文字である。二番目のグループには*e*と*d*が含まれるが、これはこの後の二つのグループの中間に位置するものであり、この二つのグループの特徴は、大きな輪あるいは開いた丸みが左側にあるか (*a*、*b*、*f*、*n*、*p*、*v*)、右側にあるか (*i*、*g*、*h*、*k*、*l*、*m*、*z*、*u*) である。最後の5番目のグループには*o*、*s*、*t*が含まれるが、ここには四角い線もなければ開いた丸みもなく、ただ多様な曲線が存在する。幾つかの文字のペアは、私たちのアルファベットをそれぞれ逆さまにしたり鏡映しにしたりしたものでしかない。*m*と*n*、*l*と*p*がそうであるし、少し完成度は落ちるが*f*と*k*もそうである。この縦の対称形に加えて、横の対称形があるが、細かいところで正確ではないものが、*l*と*m*、そして*n*と*p*のグループに見出せる（私たちのと

3) サンスクリットの書記体系と、ある程度の類似性を持つと指摘しておく。例えば火星語の*p*と*l*をサンスクリットの8、あるいはある種の*t*と*d*と比較してみること。

ころの d と q、b と p のように)。

火星語が本質的にもつフランス語らしさが最もよく表れているのは、文字の音韻的価値、つまり分節された音と線描記号の対応にある。二つの言語のあいだにある唯一の顕著な違いとしてとりあげるべきは、火星語の綴りが非常に単純なことで、これは火星語に不要な文字がないことに因る。全ての文字が、フランス語では多くの場合無音である語末子音の s、n、z 等さえも発音される。つまりこれが意味するのは、火星語の書記体系は話し言葉によって成型されており、もっとも経済的な手段によって話し言葉の分節音がただ記されているだけということである。しかしこの言語が、真に表音的な書記体系のタイプ、つまり一つの記号が基本的で恒常不変な一つの分節音に対応し、その逆もしかりというような書記体系を実現するにはほど遠い。反対に火星語には不明確さや例外、不規則性がうようよしており、それらによって同じ一つの文字が場合によって非常に多様な発音を帯びており、また逆に同じ音が異なったやり方で書かれる。そしてこれらすべての曖昧さについて合理的な説明は見つけることができない——フランス語においてもまさに同じものが見つかるということ以外は！ 言い換えると、この地球外言語とされるものの中には、一見すると私たちをさほど驚かせない特異性や気まぐれの集合を見出すのであるが、私たちの言語であるフランス語がそれらに慣れ親しませてくれているからであって、よく考えてみると、これらの特徴の集合体は偶然の産物とはとうてい考えられず、見間違えることのできない明確な特徴を構成しているのである。火星語は偽装されたフランス語にすぎない。これらの目立った偶然の一致のうち、最も興味深いもののみを取り上げることにする。これらの一致が驚くべきものなのは、私がそれらを収集する領域が非常に限定されているからである。というのも、それは書かれ、かつ同時に発音された 12 の文章のみに限定されており、全部で 160 の異なる単語しか含まれていないのだ。

火星語アルファベットの単母音は、フランス語の 5 つの母音 a e i o u

に正確に対応しており、発音の音色も同じである。この側面でもっとも興味深いのは、フランス語においてeが持っているような4つないし5つの異なった音価を、火星語も持ち合わせていることである。例えばエズナル *Esenale* [火：人名] のなかの3つのeは、メドゥシン « *médecine* » [仏：医学] と同じような連なりで発音される。エヴェ *êvé* [火：be 動詞] は、レヴェ « *rêvé* » [仏：夢見られた] と同じeの発音である。アメス *amès* [火：来る] の語末の発音は、ケルメス « *kermes* » [仏：昆虫の名] と同じである、等々。書かれた文章中にある ou, an, on のサンプルのみから判断するに、火星語の二重母音と鼻母音はフランス語と同じように発音され、また表記される。

火星語のcは（他のものも一緒だが）フランス語と同じように3つの役割を果たしている。cは喉音でありkの音価と同等であるため、火星語のカリミ *carimi*、クリゼ *crizé* のなかのcはフランス語のカール « *car* », クリ « *cri* » と同じように発音する。cの文字はまた、セ *cé* という語のなかのeの文字の前では（まだiの文字の前には来たことがない）硬いsの摩擦音となり、フランス語のアガセ « *agacé* » [苛立った] と同じように発音される。最後に、hと連結したときには、シュー音となるが、これについては後で話す。

sの字もフランス語と同じような気まぐれを見せる。ふつうはス音であるが、二つの母音のあいだに来ると、sが二つ重なっていない限り（この場合はスの発音になるが）、ズ (z) の音になるのである。例えば、火星語のソメ *somé*、アスタネ *astané*、ミス *mis* では、フランス語のソム « *somme* », アストル « *astre* », フィス « *fil* » 中のsのように発音するが、一方エズナル *ésenale* とミザイメ *misaimé* においては、sの字はエゼ *êzé*、エピズィ *épizi* の語のなかのz音と同じような発音となり、これはフランス語のsの字がビザージュ « *visage* » [顔] の語のなかで、ガズー « *gazeux* » [ガスの] と同じくズ音で発音されるのと同じ。しかしsの字が二重になると、またス音に戻る。火星語のエサテ *essate* とダシニエ *dassinie* は、フランス語のエッセ « *essai* » [試み]、アシニエ

« assigner » [割り当てる] と同じように、ス音で発音される。

逆の方向をとって、調音された音から出発して火星文字におけるそれらの表記を検討すると、すべてフランス語にすでにある特異性に行き当たる。私たちのところで複数の表現手段を持つ強い咽頭音は、火星語においてもなお二つの文字を持っており、それは c と k である。k で置き換えることによってばっさり省略されているのは、火星語では q だけである⁴⁾ (例えば、カ ka、ケ ké の語はフランス語のキ « qui », ク « que » に相当する)。同じように、強い摩擦音のス音は、通常一つの s によって表されるが (母音に囲まれているとき以外)、e の前では c に転換される。そして弱い摩擦音ズ音は、規則にしたがえば z で表されるが、ときに二つの母音のあいだにあるときには一つの s で表される。

さらに、音声的には他の多くの音と同様に単純な音であり、様々な地球の言語でそうしているように特別な文字をそれに充てることもできるような音が、火星語においてはフランス語とまさに同じ複合記号を持っていることが分かる。例えば、ドイツ語では一つの文字 (ü) で表されるような母音の音ウ (仏: ou) は、フランス語の習慣に従っている。フランス語のプール « poule » のように、ウ (ou) 音は火星語でもプゼ Pouzé、ブニエ bounié 等のように書かれ、また発音される。鼻母音のアン音 (an)、オン音 (on) についても同様であって、書かれた文章では唯一の例しかないが、そこではフランス語のサンテ « santé », ポンドル « pondre » と同じように、sandiné, pondé 等と書かれる。最後に、フランス語が地球上でただ一つ (と思うのだが)、c と h の文字の結合によって表している強い摩擦音は——この音は英語では sh、ドイツ語では sch、イタリア語では c と書かれ、多くの東洋言語では音そのもののよう単純な特別記号によって、より論理的に表記されているのだが——火星語においてもフランス語同様に ch によって表現されており、

4) [訳注] フランス語では咽頭音を表すのに c、k、q の文字が使われるが、火星語では c と k に相当する二つの文字だけを使い、q に相当する文字は k で用されるということ。

これはシェ *ché*、メティッシュ *métiche* などにおいて、シェ « *chez* » や
フェティッシュ « *fétiche* » と同様に発音される。

かなり頻繁に現れる語尾、*che* の綴りに見える小さな事実が、古い習慣の影響を意味深く暴き出し、エレーヌの手を使って書いているいわゆる火星人たち、根本的には自分たちの言語よりもフランス語を扱うのに慣れていることを示している。様々な文字化された文章を見てみると、語の最終音節における *ch* が、ときに語末の *e* を伴って (*iche*、*mache*)、ときに語末の *e* 無しで (*métich*、*antéché*) 表記されていることが分かるが、それなのにこれらすべての場合において発音はまったく同じ「シュ」であり、フランス語のリッシュ « *riche* »、タッシュ « *tache* »、メッシュ « *mèche* » の語尾と似かよっている。発音では何も説明のつかないこの綴りの違いはどこから来るのか、そしてフランス語では *e* が続かない語末の *ch* は全く別の音を持ち咽頭音になるのだから (ヴァレック « *varech* »、アルマナック « *almanach* »)、なおさら奇妙ではないか？ これは、火星文字の *h* とフランス語の文字 *e* との間の、おそらく偶然の形の類似によって生じる単純な書き間違いと解釈すべきだろう。真の完全な綴りはつねに *che* (*métiche*、*antèche*) であったのだろう。しかし、火星文字の *h* がフランス語の *e* に似た、閉じたループで終わっているため、容易に混同が生じるのである。つまりエレーヌの火星人としての人格が、語尾の *ch* を書く際に注意散漫になると、この (*h* の) ループに促された彼女の手は、語尾の *e* を描いたという感触を持ち、まだ欠けている火星文字の *e* を付け加えることを忘れてしまうのである。これは、潜在する夢が正常な人格を乱し、エレーヌのフランス語の文通に火星文字を紛れ込ませる場合 (原著 p. 67 の図 1, p. 185 の図 22) とは逆の、巻き返しとも言える現象である。この説明を裏付けとなるのは、同じく *e* の形をしたループで終わる文字 *z* でも同様の間違いが生じた事例である。書かれた文章に何度も現れる火星語の冠詞 *zé* においては、語尾の *e* が省略されることはほとんどない。その理由は二つあって、まず、二文字からなる単語では、より長い単語よりも一文字を忘れること

が困難であること、そして特に é は無音ではなく狭母音であるため、内的な発話においてより注意を引くからである。しかしながら、文章 18 の末尾には、この語尾の e の欠如の例が見つかる。その後はすべて完全に発音された冠詞 zé が、そこでは z 一文字に縮小されているのである。エズナルは明らかに、エレーヌの手を通して自分が描いたばかりのまやかしのループに騙されてしまった。これは、同じ文章の 2 行上の mé-tich という語で既に犯していた間違いと同様である。一方、同じ文章中の他の 4 つの場面では、この間違いを避けることができていたにも拘わらずである（原著 p. 194 の図 25）。

2. 文法形式

私たちが所有する文章全てを使っても、火星語文法をそこから引き出すにはまだ十分でない。しかしながら幾つかの手がかりは、もしこの文法がいつの日か完成するとすれば、その規則はフランス語文法の模写か、あるいはパロディに過ぎないであろうと予測することができる。

以下が、これまでに出てきた人称代名詞、冠詞、所有形容詞等のリストである。

主格人称 代名詞	火星語	対格／ 与格	火星語	強調形	火星語	所有格	火星語
je (私)	cé	me	lé	moi	si	mon, ma, mes	êzi, êzé, éziné
tu (君)	dé	te	di	toi	vi	ton, ta, tes	ché, chée, chi
il (彼)	hed	se	rès	lui	pi	son, sa, ses	bi, bé, bée
nous (我々)	nini	冠詞	火星語	代名詞	火星語	前置詞／縮約形	火星語
vous (君達)	sisi	le, la, les	zé, zi, zée	le	zé	de, des, du	ti tié, té
ils (彼ら)	hed ⁵⁾	un, une,	mis, misé	関係詞	火星語	au	ine
on (人, 我々)	idé			qui, que	ka, ké		

- 5) この語は、聞き取られた文章 (30) にしか現れないので、書かれるときに複数形の記号（発音されない）を取るのかどうか分からない。

フランス語と同じように、女性形が男性形から無音の *e* の付加によって派生し、複数形が発音されない小さな記号によって作られているのが見られる文章がある。この記号は私たちの *s* の名残のような外観を持っている。このようにして、*deviné* [フランス語では形容詞 « *heureux* » [幸せな] (男)] は、*divinée* [仏: « *heureuse* » (女)] となり、*ié* [仏: « *tout* » (男)] は *iée* [仏: « *toute* » (女)] と *iée* ㄱ [仏: « *toutes* » (女・複)] となる (文章 7、24、28 等)。同様に、未来時制を特徴づける語尾 *ir* は、フランス語の [未来形の語尾] « *-ra* » を思い起こさせる。そのフランス語の中間的な高さの母音が、火星語の高い音調に従って、最も鋭い母音に置き換えられているのである (*uzir* « *dira* », *dézanir* « *répondra* », *trinin* « *parlera* » 等)。いずれにせよ、これらの例 (*cé amès* は「私は来る」、*amès* は「来なさい」、*né amé* 「来た」、*dé améir* 「君は来るだろう」) だけで、火星語が屈折語であり、さらには分析的言語であって、フランス語と著しく類似していることを示すには十分である。

この二つの言語のあいだには、さらに別種の接点があり、それはとりわけ強い興味を引かれるものである。なぜなら、それが示すのは、火星語の構築において言語的イメージがしばしば優勢な役割を果たし、観念の論理的で内在的な性質を犠牲にしてきていることだからである。つまり、火星語はつねにフランス語の単語を翻訳する際、真の意味を考慮することなく、聴覚的類似性に導かれるままにそれを行っているということである。そのため、火星という惑星の言語の中に、私たちの言語と同じ同音異義語の特殊性を見出すことには全く驚かされる。このように、発音は同一だが意味においては全く異質な二つの語彙、すなわち前置詞の « *à* » と動詞 « *avoir* » の活用形 « *a* » が、火星語では同じ語 « *é* » で表されるのである。

同様に、小さな単語 « *le* » は、定冠詞と代名詞という二重の役割において、つねに « *zé* » と翻訳される (例えば、同じ文章 20 のなかで « *“le” petit oiseau* » [小鳥]、*tu “le” verras* » [君はそれを見るだろう] を参照)。同じく、多様な用法を持つ « *que* » は一律に *ké* と言われる。私たちの語 « *si* » は、

« oui » [はい] の意味においても « tellement » [とても] の意味においても il となる。多くの異なった論理関係を示す前置詞 « de » は、一律に ti と翻訳され、人称代名詞 « te » は、それが与格を表すか対格を表すかに関係なく di となる。こうした例をさらに増やすのは無駄であろう（読者が面白がるなら、他の例を容易に見つけることができるが）。これらの例が示すのは、私たちの非常に分析的な言語において言語の本質的な関節部を構成し、格変化などに代わる役割を果たすこれらの小語——接続詞、代名詞、前置詞など——が、その論理的機能を全く考慮されることなく、つねにその言語的外観にのみ基づいて翻訳されているということである。火星語はフランス語に盲目的に従っており、M. ブレアルが屈折の残存と呼んだものについて⁶⁾、独自の感覚をまったく持っていない。ドイツ語や英語といった他の言語を少しでも学んだことのある人なら、「Nous nous comprenions」[私たちは互いを理解していた]という文中の二つの « nous » を、火星語が nini nini triménéní としているように同じ単語で翻訳しようなどとは決して思わないのは明らかである。要するに、天上の火星人はフランス語でしか考えておらず、聴覚にしろ調音にしろ、もっぱらフランス語という内的言語に基づいて自分たちの言語を形作っているのは、全くもって明白である。

他にも興味深い類似点を指摘することができるだろう。フランス語では接続詞 « et »（そして）は動詞 « est »（である）と、音韻イメージの観点からは僅かの違いしかない。火星語においても、これら二つの語を翻訳する ni と né の間には最も大きな類似性がある。動詞 « être »（である）の過去分詞 nié と接続詞 ni の間には é 一つの違いしかない。これは、対応するフランス語の « été » と « et » の間の関係と全く同じである。聴覚的には « il va » の « va » [彼は「行く」] という語は、動詞 « aller (原形) » [行く] よりむしろ動詞 « venir (原形) » [来る] に近づけて捉える傾向がある。おそらくそれが、動詞「来る」が火星語で ami（文章 23）と言われる理由であろう。これは amès「おいで」、amé「来た」などの系列に属するようであ

6) M. Bréal, *Essai de sémantique*, Paris, 1897, p. 55.

る。——これらすべての一致が純粹に偶然の賜物であるとすれば、実に奇妙な事実であることを認めなければならない。

3. 構成と統語論

火星語の語順はフランス語と全く同じである。この文構造の同一性は、否定の « ne...pas » の文理や省略（例えば文章 15 と 17 を参照）、さらにはフランス語の語調上の « t » に対応させるために火星語に不要な文字を導入すること（文章 15 を参照 kévi bérimir m hed、« quand reviendra-t-il » [いつ彼は帰ってくるのか]）といった、最も微少な細部に至るまで続いている。

もしこうした文章によって私たちに与えられている語の配列が、火星語の自然な語順ではなく、生徒用の対訳本のような人工的な配置であると仮定したとしても、このような完全に一語一語対応する可能性そのものが、依然として異常な事実であり、この地上の言語には例のないものであることに変わりはない。というのも、私の知る限り、フランス語文の各々の語がつねに外国語の文の一つの語によって、多くも少なくもなく表現される言語は存在しないからである。このような逐語対応の仮説はそもそも受け入れがたいものである。なぜなら、エズナルが逐語訳を与えた火星語のテキストは、彼によって予めこの目的で編集されたものではないからだ。それらは、スミス嬢が自分の幻視の中で聞き取って記録した言葉そのものであり、しばしばエズナルがそれらを繰り返して翻訳するよりもずっと前、何週間も何か月も前のことで、火星の人物たちの生きた会話をそのまま捉えたものを構成していたからである。このことから必然的に出てくる結論は、火星人たち、その話し方において、私たちの言語の語順に一步一步、一語一語従っているということであり、これは彼らが単に音を変えただけのフランス語を話すのだということをはば意味している。

4. 語彙

語源的観点から見て、私は、火星語の語彙がフランス語の語彙から何らかの法則に従って派生したと考えることを可能にするような、いかなる派生規

則も——たとえ部分的にしる——、解明することができなかった。最初の文章を別とすれば——そこでは火星の人々が私たちの礼儀用語を歪めて盗用したことを否定するのは困難である——火星語の語彙とそれに対応するフランス語の語彙の間には明確な類似性はほとんど見られない。せいぜい、借用されたかもしれない痕跡がいくつかあるだけで、例えば *mervé* (素晴らしい) は « *merveille* » [素晴らしい] の短縮形かもしれず (文章 25)、*véché* は « *voir* » [見る] の模倣かもしれない。

火星語の語彙が外国語の影響を露わにすることは (少なくとも私の知る限りでは) さらに少ない。ときおり類似を思い起こさせる語に出会うことがかろうじてある程度である。例えば、*modé* (母) と *gudé* (良い) はドイツ語や英語の語を思わせる。*animina* (存在) は « *anima* » に似ている。動詞 « *être* » [である] と « *vivre* » [生きる] の様々な形、*êvé*、*évaï*、*essat* は、ラテン語の “*esse*”、あるいはヘブライ語の “*évé*” と、イヴが「生きている者たちの母」と呼ばれる聖書の創世記の一節を思い起こさせる。学識があり同時に機知に富んだ言語学者なら、おそらく 18 世紀風のこうした語源説のリストを長くすることに成功するであろう。しかしそれに何の意味があらうか？ この地上の言語と火星語語彙集との接触点の稀少さの中に、後者の地球外起源を支持する論拠を見出すことができるかもしれない。しかし他方、火星語の語彙のかかなりの割合がそれに対応するフランス語の音節数や文字数を疑わしいほど再現し、ときには子音と母音の配置まで模倣していることで、私たちの言語の影響を露呈しているように思われるのである。例えば、すでに言及した礼儀用語のほかに、*tarviné* (ことば)、*haudan* (家)、*dodé* (これ)、*valini* (顔) などの語、そして *cé* (« *je* »)、*ké* (« *que* »)、*il* (« *de* »)、*dé* (« *tu* ») などの単語の多くを見てほしい。こうしたことを別にすれば、火星語の語彙と私たちの語彙の間には、親族関係、系統関係、いかなる類似性の痕跡もないことを認めなければならない。これは、前の段落で二つの言語のあいだに確認した根本的な同一性と、奇妙な対照をなしている。

一見して矛盾に思えるこの事実は、それ自体にその説明を含んでおり、火星語理解の鍵を私たちに与えてくれる。この奇想天外な言語は明らかに、新

しい言語を創造しようと思いついた子供っぽい想像力による、素朴でいくらか幼稚な作品である。そしてその想像力は、自らの労作に突飛で独創的な外見を与えながらも、自分が知っている唯一の現実の言語の慣れ親しんだ型に、知らず知らずのうちにそれらを流し込んでしまったのである。言い換えればスミス嬢の火星語は、言語的实践に対して確かにセンスと適性を持っているが、フランス語しか知らず、思考の論理関係にはほとんど関心を払わず、音声学、文法、統語論の面で革新的なことを行うために労力を費やすことはない脳あるいは人格の産物であり、おそらくこれらすべての素晴らしいものの存在や、それを洗練させる可能性をちらっとでも考えたことすらないのである。無邪気な火星語の発明者ができる限り突拍子もないものにしようと努めたのは辞書だけであり、これは外国語を理解不可能な単語の集合体としてしか見ない世俗の人や子供たちの観点に従っている。彼らは一言語を特徴づけ、それを他の言語から真に区別するのはその語彙ではなく、内部構造であることを知らないからである。火星語の創造過程は、単純にフランス語の文章をそのまま取り、そこで各単語を適当に作り上げた別の単語に置き換えることにあるようである。しかしこの人工的な製造作業は、実際には試す前に想像していたものよりはるかに困難で疲れるものである。意図せずに韻律と音数の轍にはまり、短い語を短い語で、長い語を長い語で翻訳することに流されてしまい、時には気づかずに元の語の母音や子音を保持してしまうことさえある。そして結局のところ、新しいものを発明したというよりも、古いものを模倣したり変質させたりしただけということになってしまうのである。だからこそ、火星語の下にフランス語の単語構造を認識できるのは、特に初期の文章においてなのである。作者自身もそれに気づいたに違いなく、以降、自分の語彙を複雑化し、単語をますます識別困難にしようと努めたのである。この独創性への探求は——言語の純粹に音的な部分を超えたところまで進むことは決してなかったのだが、それは言語間に他の違いがあり得るという考えを作者が持っていなかったからである——、この者が想像力をかなり駆使したことを示している。さらに作者は、新語を作り出すさきからそれらを保存し、辞書を作って、その後もその辞書に忠実であり続けるよう注意を払っ

ているわけだから、こうしたことを含む記憶の作業にも同様に敬意を払わなければならない。ときには誤りや忘却が忍び込まないというわけではない。作者の語彙の固定性は最初から完璧ではなかった。しかし結局のところ、最初の躊躇の後、また幾つかのその後の取り違えを別にして、作者は称賛すべき用語の一貫性を示しており、時間と幾らかの示唆的な励ましがあれば、非常に完全な言語を——おそらくは複数の言語さえも——作り上げるに違いなく、それは文章 33 からでも予想できるとおりであるが、これについては次章で再び取り上げることにしよう。

私は火星語の語彙に見られる不一致について述べてきた。特に初期の頃に見られるものである。その多くは見かけ上の不一致に過ぎず、エレーヌまたは聞き手が時として聞こえてくる音を正確に聞き分けられなかったことに起因するのかもしれない。しかしながら、火星語の疑わしいケースをすべて有利に解釈したとしても、確実に何の聞き間違いもないにもかかわらず、単語やその正確な意味における変化が明らかなケースがいくつか残っている。例えば、テキスト 4 では、「tout」[全て]は is (この発音 イス については迷いの余地がない) と言われているが、15 日後のテキスト 7 以降では、決定的に ié (イエ) となり、女性形では iée (イエ、文章 24) となっている。同様に、kiné « petit » [小さい] (3) という語は、後に niké (20) に変化し、amiché « main » [手] (12) は éméche « main » [手] (23) になった。ただしこの変化を複数形と単数形を区別するための独創的な語形変化と見なすこともできるかもしれない！定冠詞 « la » は、文章 2 では ci (エレーヌが聞いて鉛筆でメモした通りで、エズナルも翻訳の際にはっきりと発音した) と言われていたが、後に zi (文章 27、31) になった。副詞 « là » (そこに) は、私が 214 ページで他の例を挙げた言語的混同の結果として、同じ運命をたどった (4 と 40 を比較すること)。さらに、視覚的な文章 26 では zé として現れているが、これは本当にアスタネの側の誤りである。なぜなら zé は常に « le » [定冠詞] を意味するからである。否定辞 « ne » は、

初期の文章でははっきり ke と発音されていたが、文章 17 以降は kié と発音・表記されるようになった。これはおそらく « que » を意味する ké と区別するためであろう。——その他の場合においては、一貫性の欠如は、真のフランス語対応語の一時的な忘却と同義語による置き換えによって説明できるかもしれない。例えば「瞬間」を意味する語は tensée (文章 8 と 17) で、一度は múné の翻訳としても使われているが (11)、múné の本当の意味は「時間」である (34)。同じように、triménéni (15) という語は、おそらく「理解していた」ではなく「保っていた」と訳されるべきであったろう。なぜなら、同じ箇所の続き (15) および他の様々な文章 (8、37) によれば、「理解する」の真の火星語の対応語は seïmiré という動詞だからである。同様に、patrinéz と同じく « alors » [そのとき] と翻訳された azini も、むしろ « puis » [それから] や « ensuite » [その後] を意味するようである (17)。——完全に不一致の例、すなわち全く異なる単語を用いて同じ概念を表現している例は稀である。そのような例の一つは、七ヶ月の間を置いて、エズナルが母親を「見分ける」(3) と言ったときと「見分けた」(15) と言った場合を比較することで見つけることができる。[フランス語においては] 同じ動詞の二つの形態が、cévouitche と ilinée という全く異なる二つの語で表現されているのである。

別種の変化が、フランス語の単音節語 « je » [私は]、« de » [前置詞] などを翻訳する方法において顕著に現れる。これらの語の e が省略され、次の語の前でアポストロフィに置き換えられる場合である。初期の頃、火星語は常にフランス語の語を一つの塊として、つまり一つの単位として捉えているように見える。tive : « d'un » [一つの]、ilassuné : « m'approche » [私に近づく]、zalisé : « l'élément » [その要素]、mianimé : « t'enveloppe » [あなたを包む]、méi : « t'ai » (あなたのために持っている) など (最初の 15 の文章全体を通して)。これに対して、最後のテキスト群 (29 以降) では、常に二つの語を区別しており、エズナルはフランス語においても火星語においてもそれらを分離している。

ti mis : « de un » [～の 一つ]、lé godané : « me aider » [私を 助ける]、zé brodi : « le os » [骨]、di anizié : « te envoie » [あなたに 送る] など。したがって、火星語言語学者の分析能力に、ある種の進歩があったのである。この進歩は自発的であった可能性もあるが、それを少なくとも大部分において、火星語における冠詞と代名詞 zé (« le ») の混同などについて私がレオポールと行った議論と関連付けたい気持ちになっている(次章参照)。この議論は、まさにこれら二つの文章群のあいだの期間に行われたものであり、言語的観点からエリジオン(省略)によって次の語に入れ込まれる小語の固有の価値について、エレヌの潜在意識の注意を引いたに違いない。ところで、この分析の進歩は、ある種の不一致を解消するものではない。というのも、zalisé : « l'élément » [その要素] を定冠詞 zé と名詞 alisé の縮約として理解することができるとしても(文章 14 と 28 を比較)、ilassuné méi などの形成については説明がつかないからである。なぜなら « me » [私を] は cé と言い、「te » [あなたを] は di と言うからである。また、ti と ti mis の不一致もまだ残っている。

おそらく、この矛盾と変遷のリストを延ばすことは可能であろう。しかし結局のところ、こうした僅かな欠点は、火星語語彙の非常に注目すべき全般的な不変性と比較すれば、些細なことに過ぎない。

5. 文体

残されているのは文体の検討である。もし「文は人なり」であるとすれば、つまり非人称的で抽象的な知性ではなく、具体的な性格、個人的な気質、気分や感情の揺らめきであるとすれば、火星語の文章表現の中に、幻視、言語音、文字、登場人物のような、要するに物語全体を特徴づけるのと同じ、特別な刻印を見出すことを期待すべきである。すなわち、この輪廻において作用するスミス嬢の下部人格を構成していると思われる、東洋的異国情緒と子供じみた幼稚さの奇妙な混合である。こうしたことは、正確な観察というより曖昧な美的印象の問題であり、はっきりした意見を述べるのは困難である。

しかし私が判断する限りにおいては、集められた文章の言い回しの中に、この夢全体の一般的性格によく対応する、何か言い表しがたいものがあるように思われる。

明らかに、これらの言葉は最初にフランス語で考えられる——その後、音の置き換えによって火星語に偽装される（音の選択は、この言語の高い音調について見たように、全般的に感情のムードを受け、それを反映する）——のであるから、その真の文体を判断するためには、当然ながらそのフランス語の面において考察しなければならない。残念ながら、エズナルによって与えられた翻訳が、どの程度まで元の原文と同一であるかは分からない。幾つかを詳細に検討すると、時として相違があることを示しているようである。いずれせよ、これらの文章の大部分の文学的形式が（フランス語で取ると）散文よりも詩に近いことは明らかに感じられる。どれも厳密な意味での韻文ではないが、そこに見られる多数の半詩行、倒置の頻度、語の選択、感嘆文や断続的な文の豊富さは、強烈な感傷的・詩的感情を露呈している。同じ特徴は、強い異国的独創性と古風な色調とともに、挨拶や別れの定型句（「この日幸せであれ」、「あなたの上に三つの別れを」など）にも、また私たちの日常語の素っ気なく明示的な表現よりも東洋の曖昧で隠喩的な話し方を思い起こさせる多くの表現や言い回し（「彼はあなたの存在の一部を守っている」、「この神秘的で巨大な要素」など）にも見出される。

もし今、文学史のいたるところで、詩が散文に先行し、想像力が理性に先んじ、抒情的ジャンルが教訓的ジャンルに先立つということを思い起こしてみるならば、前の段落の結論と一致する結論に達する。それは火星語（あるいはその骨格となるフランス語の文章）が、その言い回しと文体によって、遠い昔の時代の反響、原始的な心理状態の反映を私たちにもたらしめているように思われることである。そして現在のエレーヌ・スミス嬢は、その通常かつ正常な精神的気質においては、そのような状態からはかけ離れているのである。

火星語の文体には、登場人物によって著しく異なる細かい点がたくさ

んあるが、これは当然のことである。エズナルが母親に話すのとアスタネがシマンディニに話すのとでは異なるし、恋人シケの言葉は、当然のことながら天文学者先生のラミエの言葉よりもはるかに華々しい（「私の夢の太陽」など）。ただしラミエも、この地上の科学的な無味乾燥さとは無縁であり、おそらく故ル・ヴェリエ氏⁷⁾よりもフラマリオン氏⁸⁾の競争相手といったところであろう。しかし、こうした所見を述べることで本論から離れてしまうおそれがある。一つだけに絞って指摘しよう。métiche という語の用法については——これは間違いなく私たちの「Monsieur」「ムッシュー」から派生したものである（文章1を参照）——「男性」という意味で使われている（文章2、7、21、33。文章18においては、特にエズナルの立場からすると、「ムッシュー（おじさん）」と訳するのが状況に適していたであろう）。私は、この二つの全く異なる意味の混同の中に、子供たちが道で見かけたり絵本で見たりするすべての人々を「ムッシュー（おじさん）、マダム（おばさん）」と呼ぶような、まだ幼年年齢の証拠を見る気がする。これは火星文学がしめす幼児的起源の、また別の手掛かりとなるであろう。

IV. スミス嬢と火星語の発明者

先に見た火星語の分析は、火星物語の内容がすでにその作者について示唆していた考察（原著 p. 172）を支持することになる。フランス語の単語の音を変えることで本当に検証に耐えうる新言語を創造できると想像し、それを火星の言語として通用させようとするのは、浅はかな虚栄心や愚鈍さの極みであろう。もしそれが単に、人間の本性の生命力がそれなりのやり方で私たちの学校教育の愚かな残酷さに反抗し、哀れな生徒が授業の長時間を、同じ

7) 訳注：Urbain Le Verrier (1811–1877)。数学者にして天文学者。海王星の発見者として知られる。

8) 訳注：Nicolas Camille Flammarion (1842–1925)。天文学者兼作家。当時多くの出版物を通して火星人の存在を主張していた。

牢獄にいるクラスメートたちと文通するための秘密のアルファベット作成などの遊びに身を委ねることで何とかしのいでいる、あの「幸福な」年齢（なんと頻繁に使われる婉曲表現か！）の素朴な純真さの表れでなかったならば。

火星の輪廻全体は、想像力に溢れた子供っぽい人格を私たちの前に現れさせる。この人格は、光、色彩、そして東洋的異国情緒に関しては、スミス嬢の現在の正常な人格と美的傾向を共有しているが、そのあどけない性格に加えて、注目すべき二つの点で彼女と対照をなしている。1) 火星の人格は、言語的戯れや未知の言語の創作に特別な喜びを見出している（文章 33 では、火星語に加えて超火星語が現れるのを見た）。他方、エレーヌは言語学習に対して趣味も才能もなく、それを心底嫌っており、言語学習で成功を収めたことは一度もない。2) この嫌悪にもかかわらず、エレーヌは実際にも潜在的にも、ドイツ語についてある程度の知識を持っている——両親が彼女に 3 年間レッスンを受けさせたのである——。他方、火星語の作者は明らかにフランス語しか知らない。実際、もしこの作者がゲルマン語系の言語について、たとえわずかな知識だけにしろ——その言語は文の構造、発音、三つの性の存在等において私たちのフランス語とは大きく異なるのだが——少なくともいくつかの名残がその創作物の中に忍び込んだであろうし、また可能な限りフランス語から遠い言語を作り上げようと注意するなか、自分が持っている外国語文法の知識からの借用を一切控えていたというようなことを信じるのは難しい。私はここから、これほどまで豊かな言語活動を示しながらも、母語の構造的形式に完全に従属している火星の下部人格は、古い段階を表しており、エレーヌがドイツ語の学習を始めた時期以前の、いわば発達が停止した状態にあると推論する。

一方で、スミス嬢の父親が言語に対して非常に優れた才能を持っていたらしきことを考慮すると（原著 p. 15 参照）、火星語において、エレーヌの正常な人格の下で眠っていて、彼女が実際的な形では活用してこなかった遺伝的能力の覚醒と一時的な展開を目撃しているのではないかという疑いも生じてくる。才能や適性が時として一世代を飛び越して、祖

父母から孫へと直接受け継がれ、中間のリンクを省くように見えることは、よくある観察事実である。その中間世代は、家系の才能の隆起の代わりに凹みを受け継いだかのように思われる。しかし、この埋もれてしまったリンクも、これらの才能を確実に持っているはずである——なぜなら、それらを伝達するのだから——それは眠った胚芽の形で、発達していない潜在能力として、見かけ上は死んだ資産として存在している。ここでは、これらの潜在的素質を生体内で表現している解剖生理学的基盤が何であるかは重要ではない。これらの素質は、より良い形あるいは異なる形でできた後継者の持つ適性な環境で開花するのを待っているのである。何らかの形でこれらの目に見えない能力が個体に存在しているだけで十分であり、それによって、催眠状態などの特殊な状況下で、時おりこれらの能力がつかの間の光を放つことがあることを理解できるのである。もしスミス嬢が、いつの日かレオポルドの許可をついに得て結婚に身を委ねたなら、科学の幸福のために、天才的な言語学者や言語研究者の輝かしい血統を生み出し、父親の多言語的才能をより美しく再び花開かせることになるかもしれないと、考えてみることもできる。そうならば大いに考えさせられるだろうことは、彼女の夢遊病状態における火星語は、彼女が知らず知らずのうちに保持していた能力の例外的かつ初歩的な現れに過ぎなかったのだということである。

しかしとりあえず、エレヌに潜在する特別な才能を持ち出さずとも、火星語を、ことばの根源にあってすべての人間に共通するあの一般的機能の残存、あるいは霊媒的催眠の鞭打ち的刺激による覚醒に帰することができる。この機能は、民族や個人の誕生により近く遡るほど、より自発的で活発に現れるものである。生物学者たちが言うように、個体発生は系統発生を要約して大まかなところで再現する。すなわち、各個体は種族自体が辿ったのと類似した段階を経ていくのである。そして、個体発生の初期段階、つまり胚期、幼児期、少年期は、その後の時期や成人期よりも、生体としての発達を完了した個体にはもはやほとんど痕跡を残さないような祖先的形質や傾向の一時的な再現により適していること

が知られている⁹⁾。私たちの誰もが内に秘める「夭折した詩人」は、人類の始まりに伴った傾向や感情の先祖返りの最も平凡な例に過ぎない。これらの傾向や感情は子供たちの特権であり続け、各人の人生の春に様々な強さで芽吹くが、大部分の人においては遅かれ早かれ硬直化するか消失してしまう。ただし、真の芸術家においては新たな飛躍を遂げ、より高次の条件に適応することもある。すべての子供は詩人である。それも本来の、最も広い意味での詩人なのだ。つまり、彼らは創造し、想像し、構築する——そして言語は彼らの作品の中でも決して軽んじられるべきものではない。言語は最終的に社会環境が押し付ける型にはまってしまうとはいえ、その誕生と発達、子供において発揮されんとする強力な「言語創造的」活動を証明しており、それは年齢とともに弱まっていく。

私はここから、エレヌの火星状態におけるこの言語活動の再出現と展開という事実そのものが、霊媒的自己催眠が彼女のなかで沸騰させ表面に浮上させる潜在意識層の、幼児的かつ原始的、ある意味時代遅れで、彼女の通常の人格によってとうの昔に乗り越えられた性向の、新たな証拠であると結論する。火星物語の子供っぽい性格、その詩的で古風な文体の特徴、その独創的な言語の大胆かつ素朴な創作の間には、このように完全な一致が見られるのである。

9) この生物学的観点の心理学への応用例として、G・スタンリー・ホール氏による、幼児期に非常によく見られる様々な恐怖、恐怖症、強迫観念に関する非常に興味深く示唆に富む研究を参照されたい。彼はこれらの大部分を、いわば人間種族の心的状態の一時的な再現、つまり人類の初期時代、さらには動物時代にまで遡る生存条件の先祖返りの回想として容易に説明している。Cf. 「恐怖の研究」、『アメリカ心理学雑誌』第8巻、1897年1月、147頁。